図書館だより
HAKUOH
第42号 2013. 10
白　鷗　大　学

CONTENTS

「濫読のすすめ」 学長　奥島　孝康
「60年ぶりに再会した１冊の本」 総合図書館長・経営学部教授　樋口　兼次

濫読のすすめ

学　長
奥　島　孝　康

本を読むという行為は、他人の人生、他人の思考を追体験することである、というのが以前からのぼくの口癖である。

きわめて残念なことではあるが、人生は一度しかない。どんな人でも、人生を二度くり返すことはできないのだ。長寿社会がやって来たとしても、せいぜい人生100年というだけのことではないか。この程度であれば、気に入った職業を二つも三つも経験したり、好きになった女性と二度も三度も結婚を体験するには、あまりにも短かすぎる人生というべきである。だから、短くとも充実した人生を送るために、人々は懸命にならざるをえないのだ。

では、二度とない人生にとって読書はどういう意味をもつのか。当然、本を読むことによって二度も三度も人生を味わうことができるからである。このヴァーチャルな体験が一度しかない人生を豊かにするのである。中学生のころから、貸本屋や公立図書館を随分利用してきたが、大学に入学して最初の授業で、「君たちは一年間に少なくとも200冊くらいは本を読みなさい」という老教授（後の学問上の恩師）の言葉に火をつけられて、年間300冊を目標に岩波文庫を読みまくった体験がぼくのその後の大学生活を決した。否、人生を決したといってもよいのかもしれない。

こうして、いつのまにかクセとなったぼくの濫読習慣は、一方では、確かにぼくの人生を決定したが、他方では、そのためにぼくをしばしば苦境に追い込んだ。たとえば、助手のころ論文を書くための資料を図書館で探していたところ、山本周五郎全集の棚に釘づけとなり、そこで立ち読みを始め、とうとう一週間周五郎全集にのめり込み、論文作成の貴重な一週間を失うという悲惨な（？）結果を招いた。

その後もこうした失敗は続く。そのころぼくは教授となり、教務部長、図書館長、法学部長など

の役職を務めながらガンガン論文を発表していたが、それでもハヤカワ文庫のジョン・ル・カレとかマイケル・バー＝ゾウハーなどスパイものもかなり読んでいた。その直後出会ったのが、ディック・フランシスの「競馬シリーズ」（ハヤカワ文庫）であった。全38巻（当時は約30巻）はすべて読みごたえのある重厚な紳士の楽しみといった品格を備えた小説であり、文字通り夢中となった。

相当執筆の妨げとなったはずではあるが、男盛りの40歳台、ディック・フランシスを楽しみながら、毎月数本の雑誌原稿をこなしていたのであるから、自分でも信じられないほど精力的な仕事ぶりだったというほかない。周知のごとく、ディック・フランシスのものは、文庫本とはいえ一日に一冊こなすなどということはとてもできない。二、三日に一冊のペースで月に数冊を読んだとすると、他の本も読まねばならないのであるから、実のところ仕事には多大の影響があったといってよい。それでも、読まずにおれないのであるから、優れたエンタメ本であることは間違いない。その意味では、司馬遼太郎や藤沢周平の本に、かなり時間的余裕のあった若いころに出会えたことは、まことに幸運であった。そうでなければ論文など書く時間はなかったに違いない。

いまぼくは佐伯泰英の時代小説にはまっている。この三カ月で100冊は読んだのではないか。いまがヒマだというわけではない。佐伯の剣豪ものであれば、どんなに忙しかろうとも、仕事のすき間で二日に一冊は楽チンで読める。ぼくは何事も楽しくなければやらないタチであるが、小説の濫読はヴァーチャルな人生の楽しみであるから、この先もまだまだかなりの間楽しめると思っている。

どんな本でもよいから、学生諸君は月に10冊程度は読む必要がある。それを２年間続ければ、いずれ諸君がはまりこむ本に出会うことだろう。そこで新しい人生が始まる。本を読まないかぎり、新しい人生との出会いはないのだ。

60年ぶりに再会した１冊の本

総合図書館長
経営学部教授
樋　口　兼　次

♣　上野公園を北に突っ切って、旧東京音楽学校奏楽堂を左に見ながら森を抜けると、東京芸術大学の南東の角の交差点に出る。信号を北に少し歩き国立博物館の北西側の塀の対面に、国際こども図書館はある。

ルネサンス様式のしょう洒な建物の前庭に、小泉八雲のレリーフとエンジェルが戯れる青銅の噴水があり、あたりはまるでパリかウイーンの風情を漂わせている。

国際こども図書館（東京上野）

国際子ども図書館の建物は、明治39年に帝国図書館（現在の国会図書館の前身）として建てられた文明開化を象徴する建物のひとつで、国会図書館分館を経て現在、国会図書館付属の国際子ども図書館となっている。

60年ぶりに一冊の本に再会するため、ぼくは幾分上気しながらここを訪れたのだった。

◆　名前を呼ばれ、貸出係りのお嬢さんから手渡されたのは、まぎれもない思い出の一冊だった。

巌谷小波[1]著『ゆめのくに』（あかね文庫）1949年。表紙カバーだけカラーで、挿絵もすべてモノトーンの、敗戦直後のモノの無い時期の褐色がかった藁紙を用いた質素な造りも、記憶のままだった。

還暦を過ぎて、体調を崩して安眠できないでいるある夜に夢をみた。砂浜でぼくは遊んでいる。潮騒だけがして、一人ぼっちだった。さ迷ううちに大きな巻貝を見つけ、中を覗いているうちに、貝の渦巻きの中に迷い込み、通路がどんどん狭くなっていって、とうとう出られなくなる夢だった。

怖くなり、うなされ、叫び声をあげて夢から覚めた。この夢は、前にみたことがある・・・

まどろみ思いめぐらすうちに、遠い記憶の奥から、子供のころ読んだお伽話のなかに、そのシーンがあったことを思い出した。

それからというもの、ぼくはその一冊の本を、もう一度読んでみたいと頻りに思うようになった。

「いわやさざなみ」という名前は忘れなかった。滋賀県甲賀市の「水口歴史民俗資料館」に小波所縁の資料が展示されていると聞いて問い合わせたが、無いという返事だった。日比谷図書館など有力図書館の検索にもかからなかった。神田神保町の古本街を幾度も探し回り、古書店組合の検索サイトにも登録して探したが、音沙汰ないまま時が過ぎた。子供向けの本は、どこにも保存されていないのかもしれない、とおおむね諦めつつあった。

幾月か経った秋の夜、ついに所在に関する確定的な情報が、インターネットによってもたらされたのである。「巌谷小波研究」というホームページ[2]の掲示板に投稿してみたところ、土曜の夜遅く発信したのにもかかわらず、夜中の零時を過ぎて、童話文学者の細谷建治先生[3]から「国際子ども図書館に実物があります。」という情報が届いたのだ。すぐに丁重な御礼を送信した。その夜は、遠足の前夜の子供のようにわくわくして寝付かれなかった。

『ゆめのくに』表紙

♠　小学校に入って初の正月に誕生祝いとしてもらった本である。それまでの絵本とは違う、初めての「本」だった。もの心ついて最初に読み、そして本好きの子供になるきっかけとなった本と、何と60年経って再会できたのだ。

戦争が終わって10年ほどの時期、我が家もご多分にもれず食うにも事欠いていたようで、家族の祝いは慎ましいものだった。ぼくの誕生日は大晦日の直前なので、忙しさのせいにして正月祝に無理矢理統合されて省略されるのが常だった。

クリスマスは、「耶蘇教[4]の祭りはやらん！」という父の一言で行われたことがない。ぼくも父と同じことを言い、その伝統だけは今でも継承している。

そんな父が子供たちに与えた贈り物は、決って本だった。お年玉の習慣もなかった。姉たちは、甘い菓子や、きらきらした飾りの付いた身の回り物が欲しかったらしく、陰で不平を言った。が、

とにかく兄姉皆本好きである。

♥　ぼくは幼稚園に行かなかったので、小学校に上がった時に自分の名前すら書けなかった。

先生から真新しいノートを渡され「はい、みなさん！自分の名前を書いて！」と言われた。周りを見渡すと、みんな背中を丸めてせっせと書いている。ぼくは当惑した。でも、次の瞬間「ぼく、字書けない。」と手を挙げ、先生の机の前に進み出た。すると、ぼくの後ろには何人もの行列ができたのだ。それを見てぼくはホッとしたことを覚えている。そんな劣等生だったが、本を読むことだけは既に自然に身についていたように思う。

元旦に目覚めると『ゆめのくに』という本が枕もとに置いてあった。

天然色刷りのカバーの中を開くと、数編のお伽話で構成されていた。ぼくは夢中になって、繰り返し読み、すっかり主人公に成りきってお伽の世界に没頭した。柿の木に縛り付けられた子供の周りを、柿の実に手足の生えた柿坊主が輪になって踊る挿絵と筋書きを覚えていた。

砂浜で大きなサザエの渦巻に誘い込まれる話も思い出した。還暦を過ぎて夢でみたのは、これだった。

ぽつりぽつり疎らにしか人がいない閲覧室の座席に腰掛けて、本をめくるうちに涙を溢しそうになって、あわてて咳払いしながらハンカチを目に当てた。

不思議なことに、本の記憶とともに、それを読んだ時の周りの光景や香りまで、ありありと蘇えってくる。

壁にかかった額縁、いつも寝ていた和室の天井のしみ、家族の表情、食卓の様子、そして畳に寝そべって頬杖をつき、無心に本を読んだことなどが、止めどなく連鎖的に浮かび上がるのだ。

職業柄、これまで幾冊もの本を読んできたのだが、鮮明に記憶し、影響を受けた本はさほど多くはないような気がする。しかし、その僅か幾冊かの本は、心の奥底の皺に深く染み込んで、ぼくの情操を形成し、以後の人生に決定的な影響を与える要素に確実になった。

本は、文字はもちろんのこと、触感や重さ、香り、開いて目に入る挿絵、表紙の絵柄に至るすべての情報を伝えてくる。加えて、贈ってくれた人の動機や気持ちを後々まで、あれこれと詮索する機会さえも与えてくれる。

60年ぶりに再会させてくれたのは、インターネットという新しいメディアツールだった。しかし、本の持つ豊富で多様な情報、感情と思考を高度に重合させ、知の有機体を構成する力は、デジタルなど今風の情報メディアより、はるかに勝さっているように思う。

本を実物で長期に保存してくれる図書館は、それを守り育む母体なのだ。

(1)　巌谷小波（1870－1933）明治－昭和時代前期の児童文学作家、小説家。
(2)　「巌谷小波研究」のＵＲＬ　http://www.geocities.co.jp/Bookend-Shikibu/4302/
(3)　細谷建治　児童文学者、文芸評論家。批判精神にあふれた童話ノート（下記ＵＲＬ）が面白い。http://www.geocities.co.jp/Bookend-Ohgai/7542/tobira.html
(4)　「耶蘇」（やそ）は「イエス」の漢語表記で、第２次大戦前は、キリスト教を耶蘇教と呼ぶことも多かった。

ささやき

図書館では、今年度から学生の読書会活動等に対する支援を行っています！

開催時には館内の掲示板にて告知しますので、少しでも興味のあるかたは参加してみてはいかがでしょう。

また、開催してみたい団体は図書館にご相談ください。

	平成25年10月25日　発行
編　　集	図書館だより編集委員会
発　　行	白鷗大学総合図書館
〒323-8585	栃木県小山市大行寺1117
ホームページ	http://hakuoh.jp/library/index.html
印　　刷	㈱尚文堂印刷所